

埋文群馬

MAIBUNGUNMA



埋文群馬No.62 目次

● 最新レポートⅠ

金井下新田遺跡

— 一体の輪郭まで分かる「金井馬」と囲い状遺構内部の祭祀遺構の調査 —

小野 隆…… 2

● 最新レポートⅡ

東宮遺跡 — 姿を現した江戸時代以前の東宮集落 —

石坂 聡・飛田野正佳…… 6

● いま、地域が見えてくる

四戸遺跡 — 出土した奈良三彩短頸壺 —

谷藤保彦…… 8

● いま、地域が見えてくる

唐堀遺跡 — 東北地方で作られた遮光器土偶が出土 —

松村和男・立野喜紀…… 9

● 整理最前線

上武道路の発掘調査・整理が終了

— 半世紀に及ぶ調査を振り返る —

田村 博…… 10

揭示板・表紙の写真解説



公益財団法人

群馬県埋蔵文化財調査事業団

<http://www.gunmaibun.org/>

かないしもしんでん 金井下新田遺跡 (渋川市金井)

体の輪郭まで分かる「金井馬」と囲い状遺構内部の祭祀遺構の調査

主任調査研究員 小野 隆

1 平成 28 年度発掘調査成果の概要

金井下新田遺跡は国道353号金井バイパス(上信自動車道)建設工事に伴い、渋川土木事務所からの委託を受けて発掘調査をしています。3年目の平成28年度の発掘調査は、かないひがしうら金井東裏遺跡に隣接する1区と、南端の5区の調査を、前年から引き続き行いました。

6世紀初頭と中頃、榛名山の2度にわたる噴火によって、遺跡周辺は甚大な自然災害を被りました。噴出した軽石、火山灰及び火砕流堆積物は、厚さ2～3mに達し、全てが覆われてしまったのです。ところが、そのことで古墳時代の遺構や遺物、人々の生活した痕跡などが当時の姿のままバックされ、通常の遺跡では知り得ない数多くの貴重な情報を今に伝えることにもなりました。発掘調査は継続中ですが、注目される発見が相次いでいます。

2 発見! 「金井馬」と「古墳人」

金井下新田遺跡の人々に大きな被害を与えたのは6世紀初めの噴火でした。この時の噴火では10数回の爆発があり、最初の水蒸気爆発で火山灰が降下し、以降は繰り返し火砕流が発生したことが分かっています。火砕流は時速100kmを超えたと考えられ、平穏だった人々の生活が一瞬のうちに奪われてしまったのです。

1区の中央から南側の区域では、火砕流堆積物に覆われた竪穴建物5棟の調査を行いました。

この内の2棟からは、馬の遺骸3体分が見つかりました。これらの馬は金井東裏遺跡の「甲を着た古墳人」同様、火砕流に巻き込まれて、竪穴に落ち込んだ状態で発見されました。



写真1 金井下新田遺跡1区、5号竪穴建物の馬骨出土状態全景(写真の上が南)

(1) 5号竪穴建物の「金井馬」

5号竪穴建物内の床面に近い火砕流堆積物の中から、馬の頭骨・歯・脚骨が出土しました。それも2頭分が並んで見つかったのです。しかも、その骨の周辺の土が変色していることから馬体の輪郭までがはっきりと確認できました。これまでの我が国の古代馬の研究は、発見された骨や蹄跡を在来種と比較することで、体形などを推定してきました。しかし、古墳時代の馬体形態がこれほど良好な状態で残存していたのは、本遺跡が初例となり、大きな発見でした。

当事業団ではこの馬を「金井馬」と呼んでいます。建物の中央寄り、体の左側を上にして発見された馬を「1号金井馬」、建物の東壁寄り、体の右側を上にしたものを「2号金井馬」としました。いずれも、四肢を伸ばした状態で横たわっていました(写真1、2)。

現場での実測値で、「1号金井馬」は、体高120cm程度でした。臼歯の形状から2歳未満の仔馬で、性別は不明です(写真3)。一方、「2号金井馬」の体高はおよそ135cmで、臼歯などから年齢は3.5歳未満、繁殖可能な雌の馬であることが判明しました(写真4)。



写真2 5号竪穴建物と出土した2体の「金井馬」(西から)



写真3 1号金井馬(南から)



写真4 2号金井馬(南東から)

(2) 6号竪穴建物の「金井馬」

「3号金井馬」は6号竪穴建物内の火砕流の中から発見されました。先の2頭の「金井馬」よりも小柄ですが、馬齢は今後の歯の観察で明らかになります。

(3) 5号竪穴建物の「古墳人」

5号竪穴建物の2頭の「金井馬」の間からは、人の上顎第2大臼歯を含む3本の歯が見つかりました。周囲の土の変色の様子から、頭部や胴体と思われる痕跡も確認できました(写真5)。この古墳人の性別は不明ですが、年齢は10代と推定されます。

ムラの財産である「金井馬」を避難させるためか、この付近を歩いていた際に火砕流に襲われ、倒壊した竪穴建物の窪地に、馬とともに押し流されてしまったと推測しています。

年齢が分かる2頭の「金井馬」はいずれも成長期にある若い馬でした。このことから、遺跡周辺で馬の繁殖飼育が行われていたことが事実となりました。「金井馬」3頭と10代の古墳人の発見は、大陸から伝わった馬の飼育・調教等の技術などが金井遺跡群周辺で定着していたことを証明する貴重な発見となりました。



写真5 古墳人の大臼歯と頭部の輪郭

3 5区の発掘調査成果

(1) 囲い状遺構の網代垣の調査

囲い状遺構は東西48.6m、南北55.8mの方形区画を、高さ3mの網代垣が全周し、区画内部は外部から完全に遮蔽される構造となっていました(図1)。網代垣の西南角付近の南辺と北辺の柱の据え付けについての調査を行ったところ、次のことが明らかになりました。

柱は地中におよそ1mの深さまで埋まっていました。地上の高さが3mの網代垣を支えるにはこの程度の深さが必要であったと考えられます。ただし、西南角の柱穴の深さはおよそ1.3mありました。網代垣の曲がり角の柱であるため、より深く埋設したと考えられます。柱穴の掘り方の直径は30cm程度で、柱痕の形状から四角い柱材も確認できました(写真6)。

(2) 大型竪穴建物の周堤帯の調査

1号竪穴建物は方形区画のほぼ中央にあって、図1に示したとおり、網代垣東辺の中点に直交する線を中軸線とした場合、この線は建物の中央を



写真6 網代垣の柱穴と柱跡の断面(西から)

東西に通過しています。このような位置にある大型竪穴建物は、囲い状遺構の重要施設であることは間違いありません。竪穴建物が9m四方あり、床面から周堤帯の頂部までの高さが約1.6m、周堤帯の高さは30~40cmで、断面を観察したところ、建物掘削時に掘り起こしたローム土と当時の地表の黒色土の混った土が層状に盛られていました(写真7)。

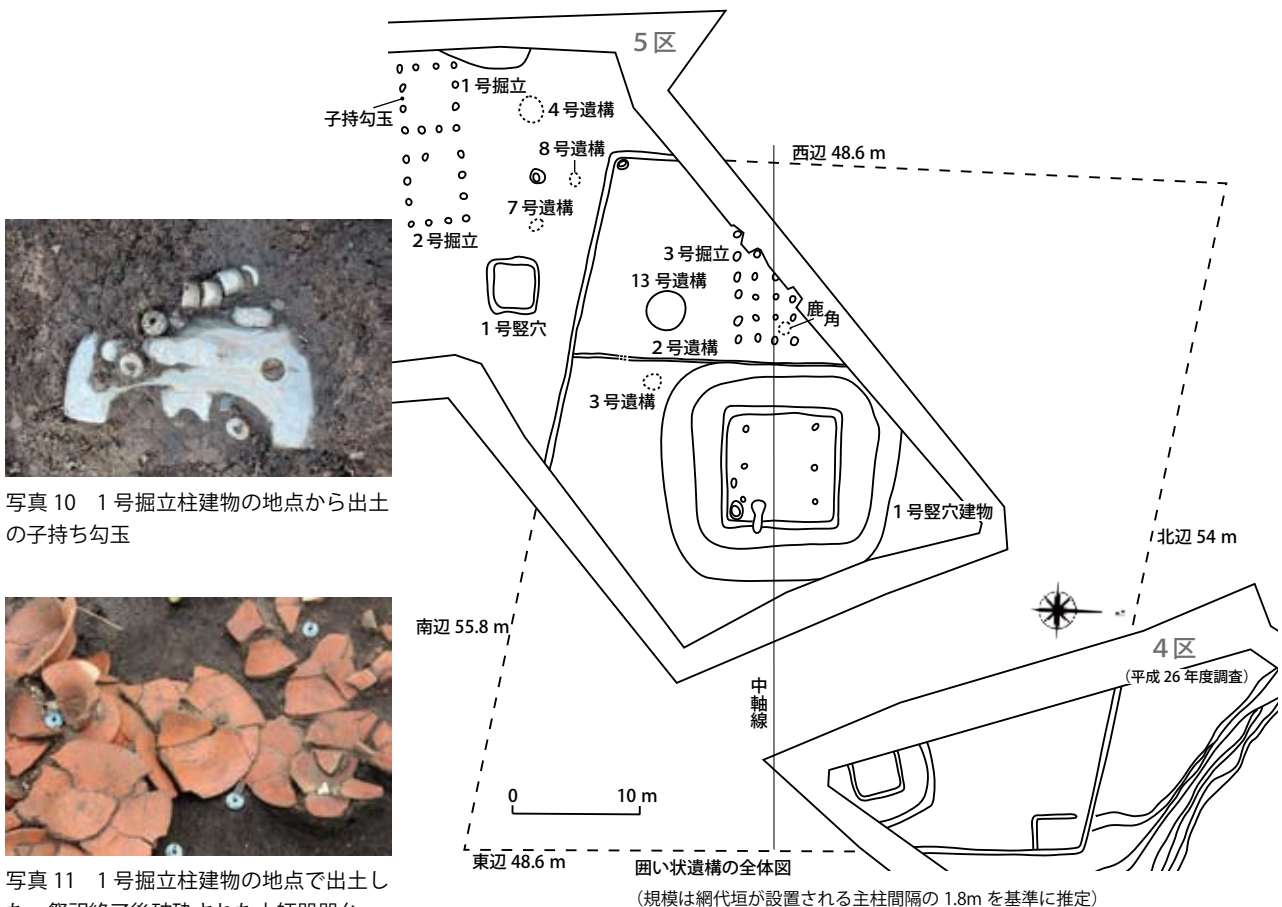


写真10 1号掘立柱建物の地点から出土の子持ち勾玉



写真11 1号掘立柱建物の地点で出土した、祭祀終了後破砕された土師器器台(東から)

図1 囲い状遺構の平面図



写真7 1号竪穴建物周堤帯の調査（西から）

（3）祭祀関連遺構の調査

① 囲い状遺構の内部、西南隅の祭祀遺構

囲い状遺構の内側の西南隅で、当時の地表面から2～3cm程の深さまで削り下げたところ、一枚の青銅鏡が出土しました。この鏡は日本国内で製作された倭製鏡で、直径が6.3cmと小型です。かろうじて見える文様の特征から「ねじもんきょう振紋鏡」といわれる種類の鏡に分類されます。古墳以外の遺構から同種の鏡が見つかるのは、群馬県内では初めてのことです。青銅鏡の下部には剣形石製模造品が2点、白玉が1点埋まっていました。その後の調査の結果から、以下のような埋納状況が分かりました（写真8、図2）。



写真8 囲い状遺構西南隅と鏡の出土状況（西北より）

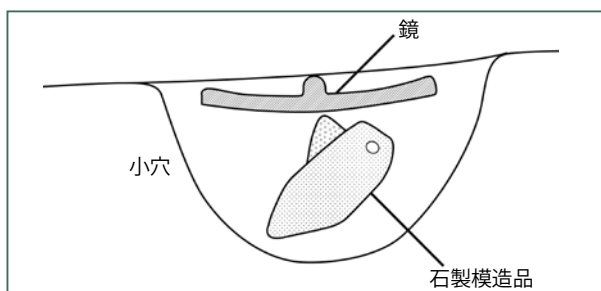


図2 鏡と石製模造品の埋納断面模式図

- (1) 網代垣を設置後に直径約10cm、深さ約12cmの小さな穴を掘る。
- (2) 石製模造品を穴に埋める。
- (3) その上に鏡面を下にした鏡を水平に置く。
- (4) 土をかぶせて埋納する。

② 囲い状遺構の外の祭祀遺構

1号、2号掘立柱建物や1号竪穴などがある囲い状遺構の西南外の一角からは、数多くの祭祀遺構が発見されました。土器、鉄製品、石製模造品などの祭祀具が数か所にまとまって出土しました。土器は土師器と須恵器があり、器台や高坏、坏などの器種で構成されていました。

特に祭祀遺構で発見された須恵器の高坏形器台は、そのほとんどが祭祀後には脚部と受部のつなぎ目の部分でふたつに分断され、脚部は地表に据え置かれたまま、受部がその脇に転落した状態だったことは極めて特徴的です。また、その他の土器類も祭祀後に破砕され、石製模造品と共に土をかぶせてあったことも確認できました（写真9）。



写真9 須恵器高坏形器台を含む祭祀跡、4号遺構（東から）

4 おわりに

囲い状遺構の内部に重要な建物が建てられ、内部及びその周辺では祭祀が幾度となく行われていたことが今年度の発掘調査で明らかとなりました。これまで形象埴輪などでしか推測できなかった、囲い状遺構の実態解明に向けて金井下新田遺跡の調査成果は大きな役割を果たすに違いありません。

平成29年度の金井下新田遺跡の発掘調査は、1区の北部を予定しています。すでに、複数の竪穴建物や祭祀跡の存在が想定されている区域です。囲い状遺構と一般集落との関係を示す新たな発見があるものと期待に胸が膨らみます。

ひがしみや

東宮遺跡 (吾妻郡長野原町川原畑)

姿を現した江戸時代以前の東宮集落

主任調査研究員 石坂 聡・専門調査役 飛田野正佳

1 はじめに

八ッ場ダム建設工事に伴って発掘調査が行われた東宮遺跡は、吾妻川左岸にあります。遺跡は平成19～21年度、平成26～27年度にも調査しており、26年度の調査では、天明3年(1783年)の浅間山の噴火に伴う泥流で埋もれた、江戸時代の川原畑村の集落が検出されています。今年度の調査は、26年度に調査をした場所の南側、旧JR吾妻線と旧国道145号線の間の南向きの緩斜面の部分を中心に、平成28年4月から12月まで調査をし、縄文時代までさかのぼる4面の文化層を確認しました(写真1)。



写真1 東宮遺跡全景(南西から)

2 平成28年度の発掘調査の成果

(1) 泥流下の畑と復旧溝

第1面は天明3(1783)年の浅間山の噴火による泥流下の調査を行い、傾斜面のほぼ全域で、噴火に伴う軽石で覆われた畑が残っていました。畑は東西方向にさくが切られていましたが、一部で南北にさく切りした畑もありました。

畑の一部では災害直後に復旧のため、泥流で堆積した土砂を埋める目的で掘られた溝が確認されました。溝の一部は同心円状に掘られており、畑の広さに合わせて復旧作業が進められていたのではないかと考えられます(写真2)。

畑以外にも地境に伴う石積み・溝・畔などの遺構や、これまでの調査で確認されていた東宮の集落から三ツ堂下を通り、道陸神峠どうろくじんへと続く、幅約180cmの江戸時代の幹線道路が見つっています。



写真2 同心円状に掘られた復旧溝(写真上が北)

(2) 近世から中世

第1面の畑の耕作土の下からは、大規模な石積み、中・近世墓、溝・ピット・土坑群、中世の屋敷と思われる石積みを伴った平坦面、掘立柱建物2棟、井戸が検出されました。

大規模な石積みは、傾斜地にある畑をできるだけ平坦にするための造成工事で、東西方向に走っていました。この石積みは地境の役割も持っており、集落内の組織的な土木工事がなされていたのではないかと考えられます(写真3)。

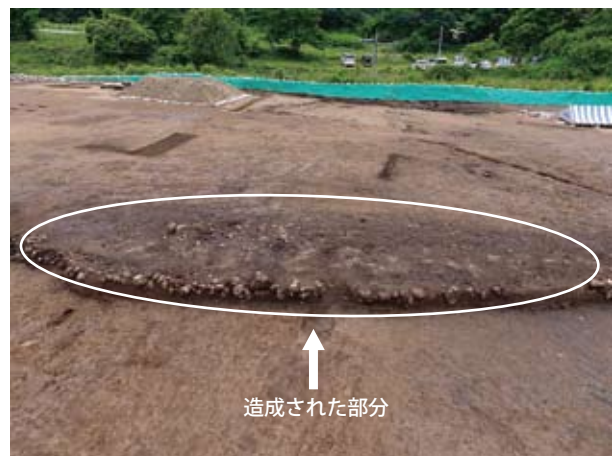


写真3 畑を造成するための石積み(南から)

(3) 縄文時代後期

第3面の調査では、縄文時代後期の竪穴住居7軒と住居群の東側で、列石、配石遺構、集石遺構を検出しました。縄文時代の遺構は、東宮遺跡では初めての発見となります。住居のうち5軒は弧状に列石を配した敷石住居でした。

住居内の炉は石囲い炉と地床炉の2通りあり、炉内からは炉体土器も出土しています(写真4)。

列石は大型の川原石を使ったもので、調査区の南から北に延びていました。配石遺構は、列石に沿って、川原石が円形に配置されていました(写真5)。



写真4 敷石住居の調査風景(東から)



写真5 列石、配石遺構(南から)

(4) 縄文時代中期

縄文時代後期の面から更に下の第4面では、縄文時代中期の住居4軒を確認しました。その内の1軒からは、埋め甕と石囲い炉が確認され、土器片もまとめて出土しました。さらに地床炉が確認できた住居もありました(写真6)。

今年度は本格的な調査は行わず、遺構確認にと

どまりましたが、今後の調査で縄文時代中期の住居と中期の集落の全容が明らかにされていくと思われます。



写真6 第4面で出土した縄文時代中期の土器片

3 おわりに

これまで天明3年よりも古い時代の遺構が確認できなかったことから、東宮の集落が形成されたのは、江戸時代以降ではないかと考えられていました。しかし、平成27年度に縄文時代後期の土器片がまとめて出土したことで、縄文時代の遺構の広がりが見込まれました。そして今年度の調査において、ついに縄文時代中期から後期の住居や縄文時代後期の配石遺構などをはじめとした数多くの遺構や遺物を確認することができました(写真7)。東宮の地は縄文時代中期から集落が形成され、土砂崩れや浅間山の噴火などの被害を受けながらも、人々がこの地に暮らし続けていたことが分かったのです。

今後の調査によって、すでに明らかとなった江戸時代の集落に加えて、中世や縄文時代の東宮の様子がさらに解明されていくことが期待されます。



写真7 住居群と列石(南東から)

しど 四戸遺跡 (吾妻郡東吾妻町三島)

出土した奈良三彩短頸壺

上席専門員 谷藤保彦

四戸遺跡は、JR吾妻線矢倉駅から南へ1km、吾妻川右岸の標高410mの段丘上に位置しています。東側には、四戸古墳群があることでも知られています。上信自動車道西吾妻バイパスの建設事業に伴って、平成25年度から発掘調査が進められ、これまでに縄文時代や弥生時代の竪穴住居、そして古墳時代から奈良・平安時代の竪穴住居、中世から近世に至る多くの遺構が調査されています。その中でも、最も四戸遺跡を印象づける発見に、平成27年12月に平安時代の竪穴住居から出土した奈良三彩短頸壺があります。今回は、その奈良三彩短頸壺を紹介します。

1 出土した住居

発掘調査は大きく1～4区に分けられ、特に2区の調査では古墳時代から平安時代の竪穴住居90軒以上も見つかりました。その結果、この時期の遺構が1～3区に最も密集することが明らかとなりました。そして、奈良三彩短頸壺が出土したのは、2区51号住居からです。この住居は、南東側にカマドをもつ、一辺4.6m、深さ55cm前後の方形の竪穴住居です。奈良三彩短頸壺は、住居



写真1 2区51号住居と奈良三彩短頸壺(北から)



写真2 出土直後の奈良三彩短頸壺(北から)

西隅の床面直上に正位で出土しました(写真1)。出土した際には、口縁部の一部が破損していましたが、破損した口縁部片は付近から出土していません。一部に剥落が認められるものの、完形に復元できる状態にありました(写真2)。住居の年代は、他の出土遺物から9世紀後半と考えられます。

2 出土した奈良三彩短頸壺

この奈良三彩短頸壺は、奈良時代(8世紀後半)に作られた陶器と考えられます。底部は板作り、胴下半部の2～3段が粘土紐作り、その後にはロクロ回転による成・整形が施され、胴中位は横方向の篋整形、肩部は撫で整形、さらに口縁部は粘土紐を付けて撫でによる成・整形で仕立てられています。さらに、1段7個の配列からなる5段の網目状の交点に、緑色を基本として褐(黄)色・白色(透明)の釉薬が配置されています。その大きさは、高さ18.7cm、口径13.0cm、胴幅25.0cm、底径13.9cmを測ります(写真3)。

群馬県内では、これまで26遺跡から奈良三彩が出土していますが、高さ5cmくらいの小型のものがほとんどです。このような大型の壺は、史跡上野国分寺跡(前橋市・高崎市)と中I遺跡(藤岡市)から出土していますが、いずれも破片で、完全なものとしては、今回、四戸遺跡から出土したものが県内で初めてとなります。このような完形の大型の奈良三彩短頸壺は、全国的にも希少なもので、今回が7例目となります。他の6例は、いずれも国の重要文化財に指定されています。また、発掘調査での出土や、竪穴住居からの出土は、全国でも初めてと言えます。



写真3 復元できた奈良三彩短頸壺

からほり 唐堀遺跡 (吾妻郡長野原町三島)

東北地方で作られた遮光器土偶が出土

主任調査研究員 調査統括 松村和男・調査研究員 立野喜紀

1 唐堀遺跡の遮光器土偶

遮光器土偶の名は、大きな目の中央に横線が引かれている表現がイヌイットの雪めがね(遮光器)に似ていることに由来します。頭部の作りから頂部が大きく吹き抜けになる冠形と、ブリッジ状で隙間が開く香炉形とに分類できます。また、内部が空洞の中空形と、粘土が詰まった中実形があります。北東北地方を中心に分布する縄文時代晩期の遺物です。

唐堀遺跡の土偶は頭部の破片で、幅10cm、高さ10cm、厚さ8cmあり、復元すると全長30cmを超す大形品になります。頭頂部が閉じ気味なので香炉形と思われます。胎土はきめ細かく、表面の調整も非常に丁寧で、滑らかに仕上げられ、目の周りの突起に至るまで手抜きはありません。中空でかなり薄手に作られており、東北地方北半部出土の遮光器土偶の特徴を備えています。

群馬県内などでこれまでに発見された模倣品の遮光器土偶は、中空となつてはいるものの胎土は粗く、作りも厚く、表面はザラついた感じの仕上がりで、目も遮光器状になっていないものもあります。胎土分析をしていませんが、見た目の特徴から唐堀遺跡の土偶は東北地方で製作されたものと言えます。

2 遺跡の立地と遮光器土偶の出土状況

唐堀遺跡は吾妻川右岸の下位段丘面にあります。上信自動車道吾妻西バイパス建設事業に伴い、平成27年9月に発掘調査を開始しました。

土偶は西側調査区の東寄りの北向き斜面の、低地部に近い地点で出土しました。当初は香炉形土

器かと思いましたが、気にかかることがあったので裏返してみたら、顔が付いていました。「わっ。遮光器土偶だ!!」思わず声が出ました。

周辺を丁寧に探してみましたが、背中の破片らしきもの1点を見つただけで、胴部や手足はありませんでした。左目の下には石があり、それで左顔面が欠けたものだとしたら、頭部の中に破片があり、「もう少し復元することができるかもしれない。」などと色々な事を考えながら急いで写真を撮って一旦取り上げました。その後、頭部内にあった破片は、事業団本部の保存処理室で慎重に取り出しました。同一個体と考えられる破片もありましたが、直接接合はできませんでした。

周りの石も配置されたものがあるかもしれないと思い、確認してみましたが、並べたり囲ったという判断はできませんでした。

また、南側の高い場所に置かれたものが北側の低地部に転がってきたものかと思い、そちらも確認してみましたが、やはり石囲いや配石等の直接関係する遺構や遺物は認められませんでした。

3 今後の課題

唐堀遺跡の遮光器土偶は、文様の特徴などから縄文時代晩期前半のものと考えています。この土偶が東北地方のどこで作られて、どのような経緯でここまでたどり着いたのか。遠く離れた群馬県までやって来た原因は何か。土偶の周辺から発見された焼けた石剣の破片・完形の耳飾りや小形岩版・赤色塗彩された小形壺など祭祀遺物との関連は何か。などなど興味は尽きませんが、詳細な検討はこれからです。



写真1 遮光器土偶出土状況(南西から)



写真2 遮光器土偶

上武道路の発掘調査・整理終了

半世紀に及ぶ調査を振り返る

主任調査研究員 田村 博

上武道路の調査

昭和45（1970）年度の沿線の遺跡分布調査・試掘調査、昭和48年度の書上上原之城遺跡の発掘調査から始まった一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財調査は、平成28（2016）年度末に3冊の報告書『川端根岸遺跡』『川端山下遺跡』『田口下田尻遺跡』刊行をもって終了となります。45年以上にわたる調査により、79箇所の遺跡が対象となり、65冊の報告書が刊行されました。

上武道路の埋蔵文化財発掘調査は、埼玉県との県境

付近から順次進められてきました。実施時期により第1期：県境～国道50号（昭和48～62（1973～87）年度、下図遺跡No.1～37）、第2期：国道50号～県道前橋大間々桐生線（平成11～16（1999～2004）年度、下図遺跡No.38～54）、第3期：県道前橋大間々桐生線～国道17号（平成18～25（2006～13）年度、下図遺跡No.55～84）の3区間に分けられます。それでは、各区間の代表的な遺跡を見てみましょう。

第1期区間の遺跡

◆安養寺森西遺跡（遺跡No.4）からは、中世館跡の堀と推定される遺構が確認されました。「安養寺」の名称は文献史料に「安養寺義貞跡」（正本文書）などと記され、新田氏に縁の深いものです。遺跡に隣接する明王院の境内から新田義貞の弟・脇屋義助の名が刻まれた板碑が出土しています。



写真1 安養寺森西遺跡の中世館堀（上空から）

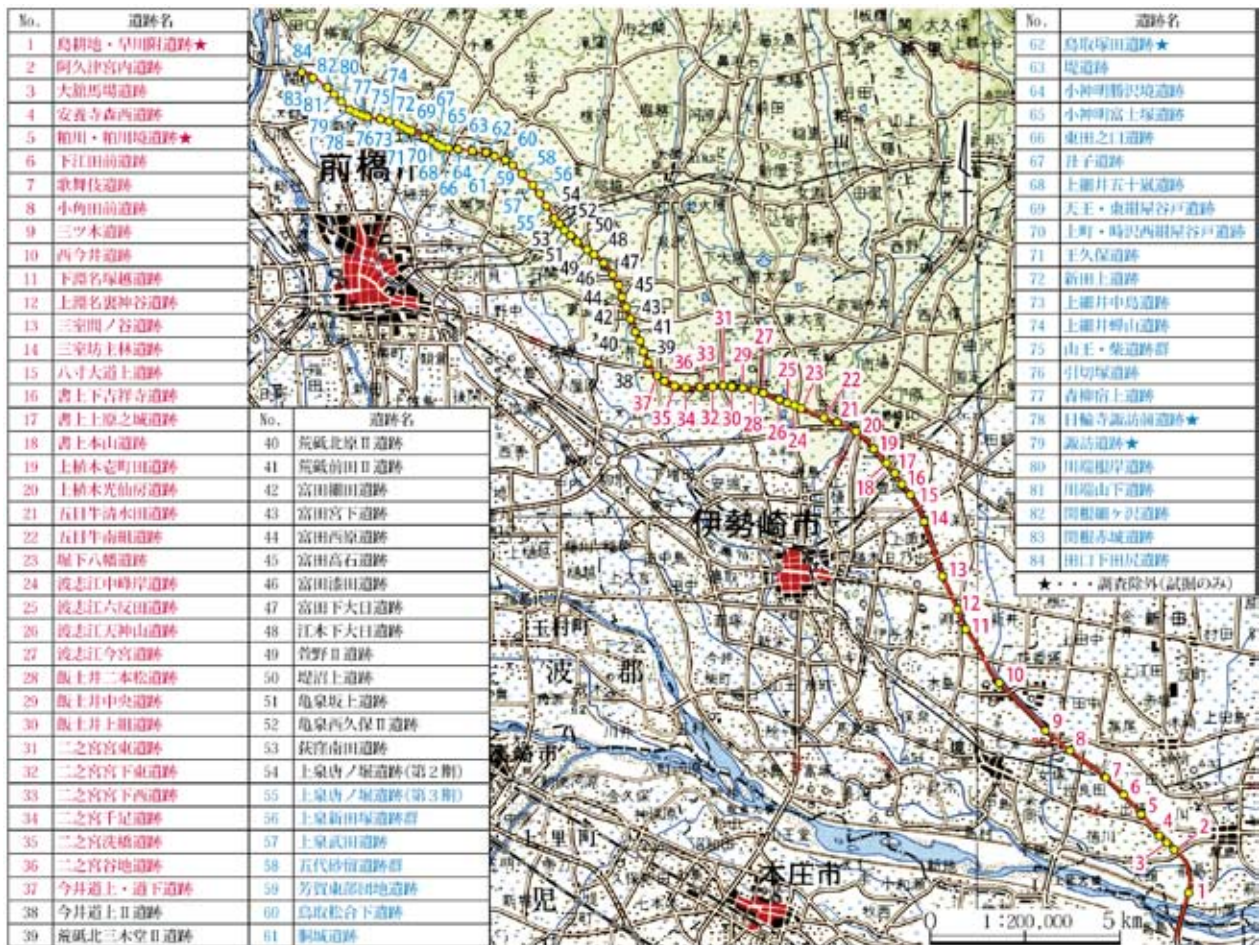


図1 上武道路調査遺跡（国土地理院 1/200,000 地勢図「宇都宮」平成23年発行を使用）

◆^{かぶき}歌舞伎遺跡(遺跡No.7)～^{しもふちなつかごし}下淵名塚越遺跡(遺跡No.11)の各遺跡からは、古墳時代～平安時代の竪穴住居が100軒以上も確認されました。第1期区間の埋蔵文化財調査が始まった頃、竪穴住居100軒を超える発掘調査は稀で、これらの遺跡は、地域の歴史を知る上で貴重な発見でした。なお、下淵名塚越遺跡の発掘調査は、昭和53(1978)年7月創立の当事業団の記念すべき第1号でした。



写真2 下淵名塚越遺跡(南東上空から)

◆^{いまいみちうえ}今井道上・^{みちした}道下遺跡(遺跡No.37)からは、「あづま道」が確認されました。淵名荘や新田荘の開発とほぼ同時期の12世紀と推定され、地域開発の基幹事業として施工された当時の幹線道路と考えられます。



写真3 あづま道(東から)

第2期区間の遺跡

◆^{あらとまえだ}荒砥前田Ⅱ遺跡(遺跡No.41)からは、巴形銅器の破片が出土しました。巴形銅器は、弥生時代後期～古墳時代に北部九州を中心に作られ元々は盾の飾りでしたが、ここでは貴重品として携帯していたのかもしれない。

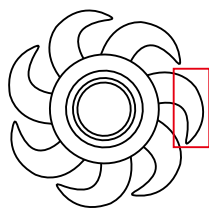


写真4 巴形銅器

◆^{あらときたさんきどう}荒砥北三木堂Ⅱ遺跡(遺跡No.39)からは、約35,000年前の直径約30cmの環状ブロック群が確認されました。ここからは刃部磨製石斧が出土しています。刃部磨製石斧は、旧石器時代に磨製の技術が存在したことを示す石器であり、世界的に見ても珍しい石器です。



写真5 刃部磨製石斧

◆^{とみだみやした}富田宮下遺跡(遺跡No.43)からは、弥生時代の竪穴住居が確認されました。遺跡の所在する赤城山南麓は、弥生時代遺跡の分布が極めて希薄なため、地域の歴史を知る上で貴重な発見でした。なお、同時期の竪穴住居は第3期区間の新田上遺跡(遺跡No.72)でも発見されています。



写真6 富田宮下遺跡の竪穴住居(東から)

◆^{つつみまうえ}堤沼上遺跡(遺跡No.50)からは、「勢多」と書かれた墨書土器が出土しました。「勢多」はかつて存在した「^{せたぐん}勢多郡」のことです。古くは『^{わみよるいじゆうしよう}倭名類聚抄』にも記され、律令時代からある郡名でしたが、平成21(2009)年、前橋市と富士見村の合併により消滅しました。



写真7 「勢多」墨書土器

第3期区間の遺跡

◆^{つつみ}堤遺跡(遺跡No.63)からは、縄文時代草創期の石槍製作場跡が確認されました。草創期は動きの速い中小型動物に対応した弓矢が出現し、狩猟具の主流となりつつあった時期です。本遺跡で製作された石槍は、長さ10cm前後・重さ25～30gと推定され、大型動物を仕留めるほどの殺傷力を備えていたようです。



写真8 遺跡の石槍製作場(南から)

上武道路の全線開通は、平成29(2017)年3月19日です。これによって地域社会のより一層の発展が期待されます。

掲示板

普及課からのお知らせ

1 金井東裏遺跡出土の「冑」と「2号甲」の保存処理が完了しました。

■金井東裏遺跡の「甲を着た古墳人」の頭の下にあった「冑」と、巻かれた状態で近くから見つかった「2号甲」は、共に古墳時代の武器の資料として貴重な鉄製品です。平成24（2012）年11月の発見以来、報告書作成に向けての詳細な整理分析作業を行った後に、劣化防止や錆止めのための保存処理を施していましたが、このほどその作業が完了しました。

今後は様々な機会を通じて展示することを検討しています。公開方法などが決まりましたら、当事業団ホームページでご案内しますので、お見逃しのないようにしてください。



2 電子メールにより行事案内をお知らせしています。

■当事業団では、年間を通じて展示会や講演会などを催しています。電子メールによるこれらの案内を希望される方は、下記のアドレスより申込みをしてください。

なお、受付時の事務処理上、事業団へ送信していただく電子メールのタイトルは「行事案内希望」とし、本文に郵便番号、住所、氏名、連絡先電話番号を記入してください。



■電子メール送付先

gunmaifukyu@apricot.ocn.ne.jp



※携帯電話アドレスへの連絡を希望される方は、パソコンからのメールが受信できるように携帯電話の設定をしてください。

■事業団のホームページ

<http://www.gunmaibun.org/>

連絡先：普及課
☎0279-52-2513



表紙解説

金井下新田遺跡 5号竪穴建物人骨および馬骨出土状態

6世紀初頭の榛名山二ツ岳の噴火活動では、10数回の噴火がありました。金井周辺には第1・第2の噴火で、火山灰が3～5cmの厚さに積もりました。5号竪穴建物は内部にも火山灰層の堆積が認められるので、窪地の状態になっていたようです。その後避難する人々や馬を、第3の噴火に伴う大規模な火砕流が襲いました。金井東裏遺跡の「甲を着た古墳人」等を襲った火砕流と同じものです。この火砕流堆積物の厚さは建物内で40～50cm程あり、人も「金井馬」も火砕流に呑み込まれ、建物の窪地で埋没してしまっただと考えられます。

(馬の輪郭を白線で示しました。○で囲んだ中心が、人の歯の発見位置です。)



本誌は、一般向けの埋蔵文化財情報誌です。
お問い合わせは、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団普及課までお願いします。

「埋文群馬」No.62
平成29年3月10日発行
編集・発行 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
〒377-8555 渋川市北橘町下箱田784-2
☎0279-52-2513
印刷 上毎印刷工業株式会社